

● 糖尿病治療の最前線 ●

低血糖と間違えやすい パーキンソン病

「手の細かなふるえ」を訴えてこられたRさん

担当医



久保 明先生

医学博士 糖尿病内分泌専門医
医療法人財団百葉の会 銀座医
院 院長補佐・抗加齢センター長

患者氏名	R・I様	年齢	75歳	性別	女性	現病歴	パーキンソン病
------	------	----	-----	----	----	-----	---------

糖尿病歴15年以上。ずっと飲み薬で治療をしてこられたRさんに異変が見られたのは、半年ほど前でした。それまで6.8〜7.0%で推移していたヘモグロビンA1cが、最高8%台にまで上がったのです。同時に、血糖降下剤を服用したときのような低血糖の症状が出るとおっしゃいます。

低血糖の典型的な症状は、ふるえ、動悸、発汗ですが、よくよく聞いてみると「手の細かなふるえ」以外は出ていないとのこと。そこで神経内科の医師に診てもらったところ、パーキンソン病であることがわかりました。

パーキンソン病とは、脳内にあるドーパミンという物質を分泌する神経細胞が変性したために、体の動きに障害が現れる病気です。50代以降に発症しやすく、指で丸薬を丸めるような細かな手のふるえや足のこわばりといった症状が特徴です。そういえばRさんも「最近、歩くのがおっくうになりました」とおっしゃっていました。

パーキンソン病と糖尿病との因果関係はな

いとわられています。しかし、手足のふるえやこわばりによって運動が制限され、血糖値のコントロールが悪くなつたことは十分考えられます。パーキンソン病が進行すると、日常生活での動作に支障をきたし、筋力や認知機能の低下につながります。

幸いRさんは早い段階で診断されたため、お薬での治療で回復をめざしていらっしゃいます。またお元気に運動ができるようになれば、血糖値のコントロールもよくなることで